

御城印のある、三重の城郭めぐり



戦国時代から江戸時代にかけて、全国各地で近世城郭が築かれました。武将たちは、本丸・二之丸・三之丸などに郭を区分し、天守(閣)や櫓を設け、周囲に石垣をめぐらせたのです。三重県内にも多くの城郭が整備されましたが、築城当時の姿をとどめているのは、石垣や櫓などごくわずかです。それでも、築城に携わった武将たちの想いや歴史的背景を知ると、感慨深いものがあります。

最近では、御城印を発行する城が増えてきました。御城印とは登城の記念証のことで、城名を記したシンプルなものから、凝ったイラストやスマホアプリと連動したもので、種類も多彩になってきています。今回は、三重県内で御城印を発行している6か所をご紹介します。

*各御城印の販売に関しては、販売場所販売時間料金販売方法などに違いがあり、状況に応じて延期休止する場合があります。事前に必ずご確認ください。

取材・文：中村真由美・中村元美・堀口裕世・中川絵美子
撮影……梅川紀彦・尾之内孝昭・中村元美
ただし※印の写真は取材先から提供していただきました

本多 忠勝ただかが築いた天守閣が3DCGで浮かび上がる

桑名城跡

〔桑名市吉之丸〕

色鮮やかなツツジが咲き競うころ、花の名所として親しまれる「九華公園」を散策していると、天守台跡や辰巳櫓跡などに加えて、築城に関わった関係者が家紋や家印などを石に刻んだ「刻印石」を見ることができました。実は同園は、桑名城の本丸跡と二之丸跡を整備した公園なのです。

桑名城を近世城郭へと整えたのは、本多忠勝です。忠勝は、徳川家康の忠臣で、徳川四天王とたたえられた武将。慶長6(1601)年に初代桑名藩主になると、本丸を中心として南に二之丸



〔柿安コミュニティパーク〕内に建つ本多 忠勝像



3DCGで浮かび上がった天守閣

てきたのを実感しています」と話すのは、桑名市観光協会の渡辺さやかさんです。お話を御城印は、忠



ARや3DCGと連動した御城印 第2版



本多 忠勝の墨絵が描かれた御城印 第3版

勝公入封420年を記念して第1版が発売され、現在は第2版と第3版が「桑名市物産観光案内所」「住吉浦休憩施設」「宿場の茶店ハジメ」で発売中です。第3版は「本社」とのセット販売。第2版はスマホアプリ「桑名城探訪」と連動し、御城印を読み込むと、天守閣の3DCGが浮かぶ趣向になっています。なお「桑名城探訪」は、指定の場所でスマホをかざすと、在りし日の城や城下町の姿をVRやARで見ることが出来る仕組みになっています。

今後は、「桑名へお城を見に行こう」という人が増えることでしょう。

*VRとは、コンピューターによって創り出された仮想的空間などを現実であるかのように疑似体験できる仕組みで、仮想現実と称されます。

*ARとは、現実の風景にデジタルな情報を付加して表示する技術のことで、拡張現実と称されます。

お問い合わせ

桑名市物産観光案内所

TEL 0594-21-5416

築城の名手、藤堂 高虎の署名と兜が
モチーフの武将印も発行

伊賀上野城

〔伊賀市上野丸之内〕



白壁が青空に映える大天守(右側)と小天守



藤堂家の家紋(藤堂蔦)が
あしらわれた御城印

伊賀鉄道「上野市駅」から、伊賀上野城めざして緩やかな坂道を上っていくと、10分程度で三層の大天守と二層の小天守が姿を現します。その流麗なたたずまいから、白鳳城と称される両天守は、昭和10(1935)年に完成した模擬天守。地元出身の代議士の川崎 克氏が、伊賀の文化や産業を盛んにすることを目的に復興しました。

とがわかります。1つ目を手掛けたのは、筒井定次。天正13(1585)年に城主となった定次は、豊臣秀吉の命を受け、大坂(現在の大阪)を守るための近世城郭を整え、本丸の東側に三層の天守閣を築きました。そして2つ目を築いたのが藤堂高虎です。慶長13(1608)年に伊賀・伊勢二国の城主となった時、大坂にはまだ秀吉の息子の秀頼がいて、一触即発の状態。そこで徳川家康は、信任厚く築城の名手でもある高虎に、大坂に対峙するための城づくりを任せました。高虎は、平和な時には津城、非常事態には伊賀上野城を居城にするため、同16(1611)年に大改修に着手。定次が築いた本丸を西に拡張し、高さ約30メートルの高石垣をめぐらせました。さらに、五層の天守閣を築きましたが、翌年、当地を襲った大暴風のために倒壊。その後、豊臣方が破れたため、天守閣が再建されることはありませんでした。

同城の御城印は、大天守入口の受付で購入可能です。管理運営を行う公益財

団法人伊賀文化産業協会の福田和幸さんにお話を伺うと、「伊賀上野城」の墨字に藤堂蔦の家紋を重ねた御城印のほかに、武将印(武将の名前や花押などをデザインしたもの)があり、高虎の書状から署名と黒印(墨を用いて押印した印判)を写しとり「黒漆塗唐冠形兜」の写真を加えたとのこと。なお、「黒漆塗唐冠形兜」とは、高虎が秀吉から拝領したと伝わり、藤堂玄蕃家(玄蕃は家臣)で所蔵していたもので、大天守1階で展示されています。城主ゆかりの兜を含む数多くの武具や調度品の中で異彩を放っていました。

大天守の1階と2階は展示スペースになっていて、ほかにも絵図や解説文などで、激動の時代を自らの力と知恵で駆け抜けた高虎の姿がわかりやすく解説されています。また、本年度の企画展「どうする家康：こうする高虎！〜家康を支えた高虎の仕事〜(12月24日(日)まで)では、高虎が家康や秀忠にも信任を得た経緯が、具体的なエピソードとともに紹介されています。見どころの多い大天守は、3階からの眺望も格別。東西南北すべての窓から、山並みを望むことができました。また、天井を彩る横山大観などが描いた大色紙46枚も見応えが

ありました。

大天守を後にしたら、小天守内の「忍び井戸」や高石垣も見えます。前者は籠城に備えて掘ったとされる井戸で、その深さは約9メートル。抜け穴もあったと伝わります。そして後者は、高虎がめくらせた石垣で、下を見ると足元がすくむ思いがしました。

伊賀上野城跡一帯は「上野公園」として整備されています。何度訪れても新たな発見と感動があるでしょう。

お問い合わせ
公益財団法人伊賀文化産業協会
TEL 0595-21-3148



御城印40枚が収納できるオリジナル御城印帳
武将印(和泉守高虎)の白筆と黒印の影印



「黒漆塗唐冠形兜」(県指定文化財)※



1メートル四方の大色紙が彩る3階の格天井



「忍び井戸」

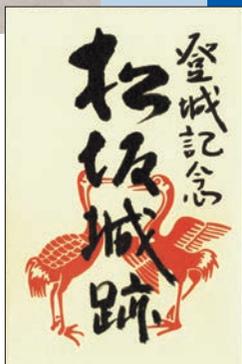


高石垣

※印の写真は取材先から提供していただきました

松坂城跡

〔松阪市殿町〕



松坂城の御城印



二ノ丸から見た御城番屋敷

二ノ丸下の石垣

「豪商のまち」のイメージが強い松阪市ですが、本来は城下町。天正16（1588）年、戦国武将の蒲生氏郷が四五百森を拓き、城や城下の町々を築いて入府しました。古くは松坂と表記され、地名は明治22（1889）年の町制施行の際に松阪に統一されましたが、城の名は、今も松坂城です。

武者隠しのあるジグザグの街路や、町の外側に寺を並べるなど、城と町を守る構えとともに、町の中央に伊勢街道を通し、出身地である近江日野などから商人を誘致し、「十楽」と呼ばれる自由な取引の制度を敷くなど商いの振興を図りました。平和な時代になってからの発展を見越したまちづくりをしたのです。

武者行列の氏郷公※



松坂城は、美しい曲線を描いて連なる石垣が印象的です。江戸時代には、二ノ丸から見下ろせる御城番屋敷や、市民病院がある場所なども広く三ノ丸と呼ばれ、土塁と堀に囲まれた城の域内でした。

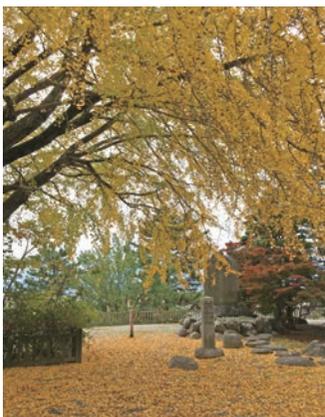


松阪市立歴史民俗資料館（小津安二郎松阪記念館）

天守閣は、正保元（1644）年に大風（台風）で倒壊したといわれ、城閣の建物は現存していません。

現在は、公園として整備され、「松阪市立歴史民俗資料館」二階に「小津安二郎松阪記念館」を併設や「本居宣長記念館」「鈴屋」などがあり、二ノ丸の藤棚、各所の桜、銀杏など四季折々に美しく、人々の憩いの場となっています。

またこの城跡は、大正時代の作家・梶井基次郎が大正14（1925）年に発表した「城のある町にて」の舞台とされ、月見櫓跡に記念碑があります。そこには、「今、空は悲しいまで晴れていた。そしてその下に町は憂を並べていた…」と城の上から見た風景の描写部分が彫られ、その言葉は年月を経たまちの景色への感慨を誘います。



銀杏が多く、秋には黄色く染まる「本居宣長記念館」内※



月見櫓跡付近には売店も

「豪商のまち松阪 観光交流センター」
TEL 0598-12516565



「蒲生氏郷公 武将印」



「豪商のまち松阪 観光交流センター」

お問い合わせ

「豪商のまち松阪 観光交流センター」
TEL 0598-12516565

※印の写真は取材先から提供していただきました

田丸城跡

〔玉城町田丸〕



町を一望できる天守跡。織田 信雄が3層の天守を建てたと言われる。

大和方面と伊勢を結ぶ「初瀬街道」、伊勢神宮と熊野三山を結ぶ「熊野街道」の分岐にあたる玉城町田丸。古くから陸上交通の要地として発達してきました。そのシンボリックな存在が田丸城です。

「ここは伊勢平野最南端の丘陵(標高約50メートル)にあたります。この地形を活かして、南北朝時代の延元元(1336)年、北畠親房が南勢支配の拠点として山城(砦)を築いたのが田丸城のはじまりです」と玉城町教育委



田丸城の御城印

員会の学芸員・田中孝佳吉さん。戦国時代には織田信長の伊勢侵攻により、天正3(1575)年に信長の次男・信雄が田丸城に入城します。その際、田丸城を石垣や三層の天守をもつ城へと改修しました。しかしその8年後に放火により焼失。信雄は松ヶ島城(松阪市)へ移り、天正12(1584)年には北畠一族であった田丸直昌が城主に返り咲きました。直昌が東北へ移ってからは、関ヶ原合戦で戦功を挙げた稲葉道通が城主となり、城の再建・改築に取り組みます。江戸時代に入ると田丸は紀州藩徳川家領となり、元和5(1619)年より徳川家家老の久野氏が代々、田丸城主を務めました。明治維新を迎えると廢城令により、城門をはじめ全ての城郭建造物の解体・処分が行われました。現在は、天守台や石垣、外堀、内堀、堀切、空堀などの遺構が整備され、他所へ移築されていた「富士見門」、三の丸の奥書院なども再度移築されるなど、往時の面影を偲ぶことができます。

「城跡を歩くと、自然の地形を活かして土塁や堀を築いた中世城郭の姿と、戦国時代より発達した石垣造の近世城郭の姿の両方が見られ、城づくりの変遷が感じ取れますよ」と田中さん。

公益財団法人日本城郭協会によって「続日本100名城」に選定されてからは全国から年間3000人以上の人が訪れ、その美しい石垣に魅了される人も多いいいます。「石垣は積み方から造られた時代が判断できます。改修を繰り返しているので、石垣をよく観察すると、自然の石を加工せずにそのまま積み上げる最も歴史の古い野面積み、江戸末期



「富士見門」(江戸時代中期)



城の正面入り口にあたる本丸虎口



田丸城の復元模型(村山龍平記念館)

から主流になった落し積みなど、さまざまな時代の石垣を見ることが出来ます。また城郭内にある「村山龍平記念館」の2階展示室では、城下町のジオラマや田丸城の復元模型などがあり、在りし日の姿を想像することができます。城跡では春は桜や梅、夏は大智蓮、秋は紅葉が美しく、遊歩道を歩いて四季折々の自然を感じたり、天守跡から伊勢平野を一望したり、思い思いに散策を楽しむのもいいでしょう。

田丸城跡の御城印は、「村山龍平記念館」でもらうことができます。通常バージョン(無料)は自分で押すことができ、



季節の御城印

伊勢和紙を使用した季節の御城印(数量限定)の販売も行っています。デザインは春夏秋冬4種類あり、春は桜とメジロ、夏は蓮にトンボ、秋はカラスウリ、冬は椿などそれぞれ城郭内でみられる動植物が描かれています。

また近くには江戸時代の田丸城主・久野家の家老が建築した茶室兼別邸「玄甲舎」もあり、築170年以上の数寄屋造りがあるので、そのままに整備され見学もできるので、合わせて訪れるのもおすすめです。

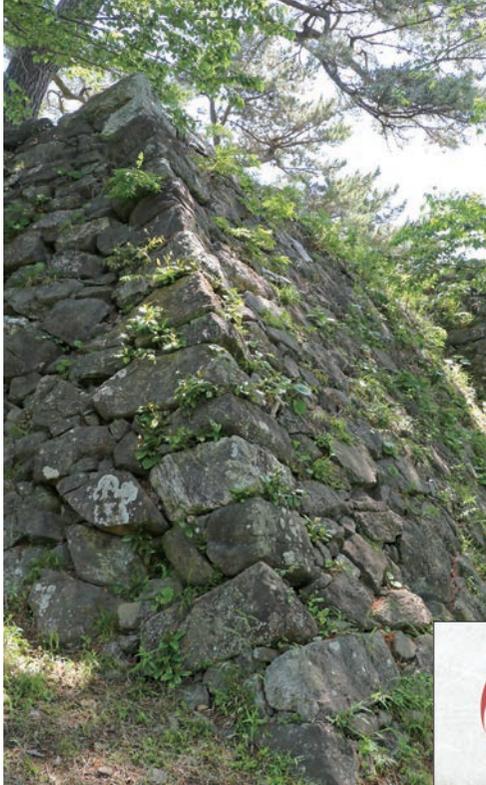
お問い合わせ

玉城町教育委員会
TEL 0596-15818212

大手門を海に開いた独特の城は
水軍武将・九鬼嘉隆が築城

鳥羽城跡

【鳥羽市鳥羽】



本丸西側に残る石垣



嘉隆と守隆の家紋入りの御城印

大手門が海側に突出して造られ、三方を海で囲まれた鳥羽城は、全国でも珍しい「海城」。戦国時代末期に織田信長や豊臣秀吉にも仕えた九鬼嘉隆が、文禄年間（1592～1596）に築いたとされ、九鬼水軍の城として威容を誇りました。

近世城郭としての体裁を整えました。内藤家が3代続いた後は、江戸幕府の直轄領を経て、土井、松平、板倉、戸田（松平）と短期間に目まぐるしく城主が替わり、享保10（1725）年以降は稲垣家8代で定着。その間に鳥羽城は幾度となく災害に見舞われています。宝永4（1727）

07年には大地震による津波によって屋敷や櫓が流失し、石垣や城壁が大破したとされ、被害が出たことが分かっています。



清水 久行さん

「天守閣があった場所に建物などは残っていませんが、近くの海や川から運び込んだ石で詰まれた石垣の一部が本丸跡に残っています。城跡からは九鬼氏、内藤氏、稲垣氏の家紋の入った瓦も採集されています」と鳥羽ガイドボランティアの代表の清水久行さん。九鬼氏の城の様子は不明な点が多く、この時に天守閣も建てられていたのかなど詳しいことはわかっていませんが、本丸の石垣などは野面積みであることから、九鬼家の段階にある程度の城郭が整備されていたと考えられます。

明治の廃藩置県により、建物は、無用の長物とされて取り壊され、堀は埋め

立てられ、跡地には旧鳥羽小学校、旧鳥羽幼稚園、鳥羽市役所、市民文化会館が建設されました。城跡の駅側部分には、城山公園としてモニユメントなども整備され、鳥羽湾を一望できるスポットとして多くの人が訪れています。

また城跡の山側の町並みは、城があった当時の地形が概ね残されており、点在する古刹の多くは江戸時代から存在したもので、細い道が入り組み、城下町の面影が偲ばれます。

城跡に続き、清水さんに周辺の九鬼ゆかりの名所も案内してもらいました。まずは日和山のふもとの賀多神社へ。



城山公園から答志島を望む



石垣が積み上がる武家屋敷跡



三の丸跡に左三つ巴の家紋



常安寺本堂裏手に九鬼家の廟所



七曜と左三つ巴の御城印

入り口の杉は樹齢400年以上の大樹で、九鬼の千本杉と呼ばれています。これは朝鮮出兵の際の日本丸を、境内の龍燈松で造ったといわれ、帰国凱旋した嘉隆は報恩のため境内に杉千本を植樹したと伝わっています。次は九鬼家の菩提寺である常安寺へ。屋根瓦には九鬼家の家紋が記されています。本堂裏手にまわると、歴代当主の五輪塔が並び、中央に嘉隆の墓碑を配置した廟所があります。延宝年間（1673～1681）のころ、丹波の綾部城主となった隆季によって整備され、嘉隆が答志島での切腹に使ったという短刀も、

寺宝として残されています。城跡の石垣を眺め、城下町の名残を歩けば、水軍武将として活躍した嘉隆の像が浮かび上がります。鳥羽城の御城印は「鳥羽歴史文化ガイドセンター」、鳥羽市観光案内所、一般社団法人鳥羽市観光協会で購入可能。九鬼家は嘉隆の時代に「左三つ巴」、息子の守隆は「七曜」を家紋としたため、その2つと、両方の家紋をあしらったパターンの3種類が用意されています。

お問い合わせ

一般社団法人 鳥羽市観光協会
TEL 0599-12513019

築城名手・高虎による天空の城は
中世と近世の築城法を併用した平山城

赤木城跡

【熊野市紀和町赤木】



赤木城の御城印

小さな盆地に位置する熊野市紀和町赤木地区。周辺は山地が連なる険しい地形で、230メートルの丘陵にある城跡が朝もやに浮かぶと、幻想的な天空の城として話題になっています。

虎口を二重に設けた複雑な設計

赤木城は、築城の名人として名を馳せる藤堂高虎が築いたとされ、中世の城らしい地形の使い方でありながら、近世の城の特徴である石垣や技巧的な設計が導入された先駆的な城です。

城跡は平成元（1998

9）年に国の史跡に指定され、平成4年から13年かけて石垣の積み直しや遊歩道の設置などの維持整備を行い、復元作業を行ってきました。

城を象徴する石垣は、自然のままの石で積んだ野面乱層積みで反りがなく、各郭の四隅は算木積み。直方体の石の長辺と短辺を交互に積んで崩れないように強度をアップしています。「城の生命線ともいえるのが主郭の出入口。何度も折り曲げて二重の虎口を設けた複雑な設計です。また戦いするとき以外は登城の通路となるので、上段の虎口には大きな石を用いて、入ってきた敵を威圧します。最上の階段横には門柱の礎石も見つかっています」と赤木城に詳しい案内人の和田利信さん。横矢掛かり、犬走りといった防御設備を備えていて、主郭の周囲を歩き、その構造を観察することができます。

主郭には建物跡を示す大きな礎石が至る所に残され、その北には台形型の北郭が築かれていました。「北郭のさらに北側の山林にこの城の隠れた魅力がある

んです。奥には深い堀切が設けられ、攻撃に備えていたことがわかります」と和田さん。



和田 利信さん

次は段々状に設けられた西郭を歩きます。一番上の「西郭1」では2棟の建物跡、食料品を入れる室、水溜が見つかり、天目茶碗や砥石、釘が出土しています。ここから山道を少し下った山裾の平坦地に南郭が築かれ、かまど跡などから、おもに生活の場であったと考えられています。熊野の地は、天正13（1585）年、紀伊国に侵攻してきた羽柴（豊臣）秀吉の



主郭への階段。かつては取り外し式



北郭から山へ入ると堀切がある



段々に形成された西郭の石垣



田平子刑場跡に立つ供養碑

傘下に入り、当時、畿内の城や寺社造営の木材の供給源として重要視されました。赤木は吉野への北山街道を通り、田平子峠を越えて本宮方面へと通じる十津川街道もある拠点の地で、高虎はこの北山地方の材木奉行に任命されます。そして秀吉の弟・秀長が、北山地方での太閤検地を指令すると、耕地の少ない北山で重い年貢を課せられれば生きていけず、農民は免除を嘆願するも許されず、死滅覚悟で立ち上がります。この天正の北山一揆を鎮圧したのが高虎で、落成祝いとして農民を赤木城に呼び寄せ、一揆に参加した者を近くの田平子峠

に引き立てて斬首したと伝わっています。赤木城は豊臣政権の力を象徴する城でもあったのです。今、田平子峠刑場跡には供養碑が建立されています。新領主に対して抵抗を繰り返しながらも鎮圧されていく過程を示す、大切な遺跡となっています。赤木城の御城印は、国道311号沿いの道の駅「熊野・板屋九郎兵衛の里」にて、季節限定と築城の名手・藤堂高虎版を合わせて3種類販売されています。

お問い合わせ

熊野市観光公社

TEL 0597-189-2229



高虎版と季節限定の御城印